



家政学部生活福祉学科 教授
田 口 弘 康

田口弘康教授 略歴および主要著作

学 歴
事 項

昭和34年3月	愛知県立明和高等学校 卒業
昭和34年4月	名古屋大学理学部 入学
昭和39年3月	名古屋大学理学部化学科 卒業(理学士取得)
昭和39年4月	名古屋大学理学部化学科有機化学教室 研究生(田辺製薬株式会社より派遣)
昭和41年3月	同 上 修了
昭和45年1月	オーストラリア国立大学・基礎医学部・医化学教室 大学院博士課程 入学
昭和47年12月	同 上 修了(Ph. D.取得(医化学))

職 歴
事 項

昭和39年4月	田辺製薬株式会社・有機化学研究所 研究員(昭和49年3月まで)
昭和48年1月	ジョンスホプキンス大学公衆衛生学部生化学教室 研究員(米国)(昭和49年10月まで)
昭和49年11月	ハーバード大学化学教室 研究員(米国)(昭和50年12月まで)
昭和51年1月	名城大学薬学部製薬学科 助手(昭和51年3月まで)
昭和51年4月	京都女子大学兼京都女子大学短期大学部 助教授(昭和61年3月まで)
昭和57年4月	オーストラリア国立大学基礎医学部医化学教室 客員研究員(昭和58年3月まで)
昭和60年7月	オーストラリア国立大学基礎医学部生化学教室 客員研究員(昭和60年9月まで)
昭和61年2月	オーストラリア国立大学基礎医学部生化学教室 客員研究員(昭和61年4月まで)
昭和61年4月	京都女子大学兼京都女子大学短期大学部 教授(現在に至る)
平成4年4月	オーストラリア国立大学基礎医学部分子生物学教室 客員研究員(平成5年3月まで)
平成6年7月	オーストラリア国立大学基礎医学部分子生物学教室 客員研究員(平成6年9月まで)
平成7年7月	オーストラリア国立大学基礎医学部分子生物学教室 客員研究員(平成7年9月まで)
平成11年4月	京都女子大学 家政学部学部長(平成13年3月まで)
平成17年4月	滋賀医科大学 客員教授(現在に至る)

学会及び社会における活動等

事 項

昭和51年4月	日本化学会 正会員(現在に至る)
昭和51年4月	有機合成化学協会 正会員(現在に至る)
昭和58年1月	Royal Society of Chemistry(英国王立協会) 正会員(現在に至る)
昭和59年6月	一般教育学会(現在は「大学教育学会」) 正会員(現在に至る)

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
I 総説 Glycerol-Ether Monooxygenase [EC 1.14.16.5]. A Microsomal Enzyme of Ether Lipid Metabolism.	共著	Med. Res. Rev., 18 巻, 43-89	1998 年	膜結合酵素であるグリセリルエーテルモノオキシゲナーゼに関する最初の総説。本酵素の所在, 性質, 単離方法, 加えて本酵素の基質であるグリセリルエーテル類の歴史, 生物学的医学的意味付け, 合成, 生合成, 化学的物理的性質について述べ, プテリン補酵素の構造活性相関および本酵素による水酸化反応のメカニズムと活性部位における立体化学にも言及。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 <u>H. Taguchi</u> and W. L. F. Armarego
II 主な論文 Ultraviolet Spectral Correlation between the Cation of an Amino-N-heteroaromatic Compound and the Neutral Species of the Corresponding Oxo-analogue.	共著	J. Chem. Soc. Perkin II, 1101-1103	1973 年	2-アミノピリミジン (および縮合ピリミジン) 誘導体のカチオンとこれらに対応する 2-カルボニル誘導体の紫外線吸収スペクトルが酷似しているという法則性を発見。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 A. Albert and <u>H. Taguchi</u>
Preparation and Stereoconfiguration of Heterodimers of Pyrimidines.	共著	Biochem. Biophys. Research Commun., 73 巻, 356-363	1976 年	1,3-ジメチルウラシル光二量体を特異的に C-メチル化する方法を開発し, 1,3-ジメチルウラシル光二量体の全て (4 種) の立体異性体から出発してチミン-ウラシルヘテロ光二量体の立体異性体の全てを合成。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 <u>H. Taguchi</u> and S. Y. Wang
A Promising Cyclization Reaction to Construct the Saxitoxin Ring System.	共著	Tetrahedron Letters, 627-630	1977 年	アラスカ産のハマグリから単離された神経毒サキントキシンはペルヒドロプリンを含む三環性の構造を有する。この毒の全合成に先立ち, 基本骨格の立体選択的な効率の良い合成法を開発した。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 <u>H. Taguchi</u> , H. Yazawa, J. F. Arnett and Y. Kishi
Photosensitized Dimerization of Methylcytosine Derivatives.	共著	J. Org. Chem., 42 巻, 4127-4131	1977 年	シトシンおよびその N-メチル化された各種誘導体を光増感剤存在化, 紫外線照射により得られる化合物の構造決定を行なった。立体化学については温和な条件下に脱アミノ化し, 既知のウラシル光二量体に導くことにより決定した。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 <u>H. Taguchi</u> , B. S. Hahn and S. Y. Wang
Bromination of Cytosine Derivatives.	共著	J. Org. Chem., 44 巻, 4385-4393	1979 年	シトシンとその誘導体の臭素水を反応させることによって得られるプロモヒドリン付加物の構造を決定。これらの紫外線吸収スペクトルとシトシンの 5,6-ジヒドロ体の構造に言及。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 <u>H. Taguchi</u> and S. Y. Wang

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の 別	発行又は発表の 年月	発行所, 発表雑 誌等又は発表学 会等の名称	概 要
Peroxidase Catalysed Aerobic Degradation of 5,6,7,8-Tetrahydro-biopterin at Physiological pH.	共著	Eur. J. Biochem., 135 巻, 393-403	1983 年	フェニルアラニン, チロシン, トリプトシンを水酸化する酵 素の補酵素であるテトラヒドロピオプテリンに酸化される が, その後脱アルキル化してジヒドロキサントプテリンに なる。この反応機構について報告。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 W. L. F. Armarego, D. Randles and H. Taguchi
New Pteridine Substrates for Dihydropteridine Reductase and Horseradish Peroxidase.	共著	Biochem. J., 234 巻, 335-342	1986 年	4,5-ジアミノピリミジン-6-オン, テトラヒドロプテリジン -4-オンなど, 2 位のアミノ基が欠落したプテリジン類は ジヒドロプテリジンレダクターゼおよびベルオキシダーゼ の基質であることが分かった。2 位のアミノ基は酵素活性 に必須ではなく, 酵素との結合に有効なのである。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 W. L. F. Armarego, A. Ohnishi and H. Taguchi
Glyceryl-Ether Monooxygenase [EC 1.14.16.5]: Nature of the Glyceryl-Ether Lipid Substrates in Aqueous Buffer.	共著	Biol. Chem. Hoppe-Seyler, 375 巻, 329-334	1994 年	グリセリルエーテル モノオキシゲナーゼの基質を溶解す るために用いる界面活性剤 (Mega-10) は本酵素に対して 非拮抗的な阻害作用を示した。また, 基質の分解産物オク タデカノールは競争的阻害作用を示した。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 H. Taguchi, B. Kosar-Hashemi, B. Paal, N. Yang and W. L. F. Armarego
Glyceryl-Ether Monooxygenase [EC 1.14.16.5] Part VIII. 36. Probing the Nature of the Active Site.	共著	Pteridines, 6 巻, 45-57	1995 年	アルキル側鎖の長さが C11~C22 のグリセリルエーテルを 合成し, それぞれのグリセリルエーテル モノオキシゲナ ーゼ活性を測定。C16 と C18 が最強で, C12 以下と C19 以上には活性がなかった。また, その他のグリセリンのエ ーテル化合物の活性も調べ, 本酵素の活性部位の構造につ いて推論。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 H. Taguchi, B. Paal and W. L. F. Armarego
Glyceryl-Ether Monooxygenase [EC 1.14.16.5] Part IX. Stereospecificity of the Oxygenase Reaction.	共著	J. Chem. Soc. Perkin Trans. I, 303-307	1997 年	グリセリルエーテル モノオキシゲナーゼの基質であるチ ミルアルコールの 1' 位の水素原子のひとつをトリチウム で置き換え, 立体選択的に (1'R) 体と (1'S) 体を合成。 本酵素との反応では, (1'R) 体からのトリチウム離脱は認 められず, (1'S) 体からのみ認められた。これは, pro-S の水素が離脱して水酸基が導入されることを示す。 担当部分: 共同研究のため担当部分抽出不可能 H. Taguchi, B. Paal and W. L. F. Armarego